

令和2年4月1日発行 春燈/第75巻第4号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

4 月号

2020 April



成瀬櫻桃子の句

囀を浴びをり人を愛したし

『風色』昭和四十八年

これこそ櫻桃子の偽らぬ気持であつたらう。

人はそれぞれに愛すべき長所を持っている。誰をも平等に愛したい櫻桃子であつたと思う。しかし、それに背く行動をとることがある。それ故、人そのものの底にある原罪を常に意識し、追い詰めてゆくと宗教にもつながる深い重い苦しみを担っていたように思われる。へ人は罪を綿虫は綿負ひにけりゝを見てわかる。

三上程子

成瀬櫻桃子の句

聖母祭のプリンやはらかし妻がつくり

『風色』昭和四十八年

聖母祭はマリアが受胎告知を受けた三月二十五日。少し苦みのあるカラメルソースは大人の味だ。プリンは一寸した火加減で舌触りも違ってくる。きつと櫻桃子先生の大好物だ。そして何よりお嬢様も大好きだったに違いない。句は六八六の字余りの句だが、中八の「プリンやはらかし」の「し」が効果的で、奥様に対する愛情と感謝の気持を深めている。

木村みどり

安立公彦

冬董むらさき淡く日を返す

立春の足音と聴く夜の雨

卒業子夕日飽くなく見つつをり

末黒野や噴煙とほき桜島

ミモザ咲きわが誕生の日や近し



燈下集

○ 金山雅江

新しき皇居時に初雀

女正月帯の結びも母ゆづり

初場所や幕尻優勝わきに沸く

只今と言へる幸せ福寿草

どんど燃ゆ万葉の火と令和の火

○ 太田佳代子

残像のたしかな真紅寒薔薇

長く住む町の居心地寒すずめ

ほどけたる雲のとどまる冬木かな

一度書きし答を消すや雪催

わづかづつ日脚伸びゆく忌明けかな

○ 久保久子

明け初むる堅田の湖や初諸子

粥柱こころ養ふ傘寿かな

枯はちすあつけらかんと水鏡

匂やかに連れだつ舞妓春隣

薄氷や余生の道はひかりけり

○ 長谷川歌子

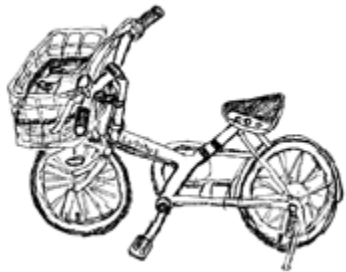
日のかけら鳩の啄む枯芝生

買初や幸運といふ黄の財布

商ひの荒波躲し鳥総松

女正月齢のなげき御法度に

時待つや冬芽ほのかに紅差して



○ 廖 運 藩

初夢は父在りし日の男振り
初夢の何処とも知れぬ山と河
筆始め祖伝十代端漢硯
旧正の祖祠にちらほら混血児
老友の皺頼もしや初句会

○ 久米 憲 子

美人画の燃やすに惜しき古曆
初御空ここまで生きて仰ぎけり
匂やかな礼にはじまる御慶かな
早梅の真白をくぐり祠まで
歯を磨き舌もみがきて初閻魔

○ 小倉 陶 女

初鴉こそぞの声を張りにけり
初電話地球の裏の声確か
悴みて心といふ字乱れけり
ていねいに掃く門口や松納
はかどらぬ稿に余寒のつりくる

○ 荒 井 慈

絵双六浮世絵美人の細面
人日や寿命の尽くる給湯器
「梅園」のいちご大福女正月
水仙の香やよみがへる祖母の笑み
春隣陶の小人の鼻眼鏡

○ 佐渡谷 秀 一

読初や令和言祝ぐ万葉集
新聞の散らばつてをり初電話
訪るるひとなく日の落つ実千両
菜を刻む音のかそけき寒九かな
大寒や採血痕の絆創膏

○ 沼田 桂 子

うずぎりの蕪のやうな冬満月
ねむる子のほほゑんでゐる春隣
豆を撒く心の闇を追ひはらふ
美容院の休業札やシクラメン
春の雲ひと横たはるやうにかな

○ 宮田 豊 子

名香を焚きていよいよ炉火赤し
侘助の庭明るうす風なき日
冬の梅老木の唄かそけしや
京焼の鉢に合ひけり冬菫
マスクしてせはしなき眼で挨拶す

○ 三代川 玲 子

若水汲む祖父かしこみてへの字口
綿入の同じ黒衿姉妹
海よりの風をあまして野水仙
小刻みに福撒く翁里神楽
きび餅のほのかな苦味寒の雨

○ 呂 秀 文

文語文の讚美歌確か読始
祝元旦祝旧正と天手古舞ひ
防寒なき亜熱帯地に寒波来る
着ぶくれて美貌の誉れ形もなし
色白は母譲りなり初鏡

○ 豊谷 青 峰

薬石は酒と言ひつつ去年今年
狐火や酔歩蹣跚川の風
飴色の数の子届く妻の留守
生け作りの尾鰭動くや冬座敷
生涯を通す現役年の豆

○ 井上 正 子

猫柳夫を誉め上げ卒寿越ゆ
夫は無口われは饒舌春来る
義父の世話長きに及ぶ二月尽
研修医何科選ぶや三月尽(孫娘)
春浅し七つの人形壁にかけ

○ 高埜 良 子

晴れ渡る浅間嶺確と初景色(祝・喜宴と)
獅子頭脱ぎて笑顔の町会長
臘梅の日差し透くるやシャッター音
年の豆いつしか減らす齡かな
「おはよう」の声一斉に黄水仙

余言

安立公彦

青空へ令和の富士や今朝の春 鷹崎由未子

昨年五月から代わった「令和」の御代も二年目に入った。令和の正月を迎えるのは初めてである。この句を見ていると、年号という象徴天皇制の皇位継承を改めて思う。昭和平成、令和と続く元号は、私たちの祖国の揺るぎ無い国体である。その「令和」にもようやく馴れて来た。

この句は、その令和の新年を高らかに謳い上げている。「令和の富士」が善い。それを新年の青空が高々と捧げているのだ。富士山の高貴さが出ている。

冬波や静かに暮るる夫婦岩 鈴木 鳳来

この「夫婦岩」は、三重県二見ノ浦にある夫婦岩だろう。洋上にこの夫婦岩を望む思いは格別だ。立ち止まり、昇る朝日を見ていると、時の経つのを忘れる思いだ。

この句、そういう心の感動を押し、夫婦岩を、「静かに

恵方に当たる神社仏閣に参詣するのを、恵方参りと言う。

この句、作者は正月が来て「傘寿」となった。現在七十五歳以上を後期高齢者と呼ぶが、傘寿となった今は、老後への新しい一歩の始まりと言えよう。「我が歩むこの道が、恵方に通うように」と願う思いは、全ての高齢者に通じる思いである。「この道を」が善い。「傘寿かな」が善い。かな止めの、格調高い、思いの深い句だ。

明け初むる堅田の湖や初諸子 久保 久子

「堅田」は、滋賀県大津市の、琵琶湖南西岸の地名。この堅田にある浮御堂に落雁を配したが、近江八景の一つである。「諸子」は鯉科の小魚、琵琶湖の固有種である。

この句、「明け初むる堅田の湖」が、琵琶湖と言う日本一の広大な湖を善く表わしている。風光明媚とは、こういう景を表す言葉だ。「初諸子」の座五も善い。広大な琵琶湖と、そこに見る小魚との取合せが新鮮だ。

生涯を通す現役年の豆 豊谷 青峰

潔い信条の句だ。「生涯学習」は善く聞き、またその思いの人も多かるう。俳句作家にとって、「生涯学習」は必須のものと言える。しかし「生涯を通す現役」はまた別格だ。「現役」の範囲は広大である。

暮るる」と表現する。この中七が夫婦岩の形象を、日常の夫婦愛に昇華させている。思いの深い句と言える。

前向きでゆるりと歩め亀の鳴く 加藤 良子

「ゆるりと歩め」は、亀に対してではなく、わが身への自覚の呼掛けである。歳時記には「亀鳴く」と載っているが、実際に亀の鳴くことはない、とのこと。

この句を見ていると、そういう事実は理解出来ても、上五中七の表現には、亀と歩みを共にしている感じが浮かんで来る。ゆるやかなテンポが、亀鳴くに相応しい。

初風の島引き寄する夕茜 岩永はるみ

「初風」は、元日の海が風もなく穏やかになること。その初風の沖には、小島が一つ浮かんでいる。如何にも元日の海らしい安らかな景である。やがて夕刻となり、その小島をつつむ海上は茜の色に染まってゆく。

この句、「島引き寄する」が善い。感覚と実景の間を、この中七がみごとに納めている。これこそ、表現の発見と言えよう。「夕茜」がその景をしつかりと支えている。

この道を恵方と願ふ傘寿かな 林 紀夫

「恵方」は、正月の神の来臨する方角。元日にその年の

作者の「現役」については未知だが、「生涯を通す」程の遣り甲斐のある仕事だろう。節分の夜、豆を撒きながらその思いを自らに誓う作者、潔い句である。

裸木の明るさにあり夫の墓 松山三千江

「裸木」は、冬季落葉を尽くした木。亡き夫君の墓参りに訪れた作者。墓前にぬかずくと、廻りの木々は葉を落とし裸木の明るさにある。仰ぐ空には一朵の雲も無い。他に墓参の人も居ない冬麗の墓域。ひとり亡き夫君と語る作者。「夫の墓」が中心となっている句だが、一句を通して、この玲瓏な読後感は立派だ。

ふるさとや布団に残る陽のほひ 近藤 真啓

一読懐かしさを感じる句である。作者の故郷は何処か、千葉県と聞いた気がするが確かな記憶ではない。

久しぶりに故郷に帰った作者。夜になり、寝具にくるまると、陽の匂がわが身を包むのを覚える。「布団に残る陽のほひ」は、帰宅者の誰もが感じること。更に、その「陽のほひ」は、イコール故郷の匂であることも、また帰省者の感慨であることは、言うまでもない。

作者は、今年から燈下集作家の一員となった。同時入集の皆さんと共に、健吟を願って止まない。

当月集

安立 公彦選



○ 中澤 弘

踏切の音冷えびえと冬の朝
節分会若き男の子の声凛々し
猫膝にゆるがぬ夫婦春炬燵
初午や朝食の膳のしもつかれ
初午の旧家に干せる鬼おろし

○ 田中 嘉信

○ 佐俣まさを

池の面を錦に括る散紅葉

初空やビルのあはひの富士白し

白聖館淡き冬日に抱かるる

信念の人でありたし雪椿

大嘗祭御装束の白極む

薄明に沈むビル街寒に入る

松籟や淑気満ちぬる二重橋

踏み切れぬ免許証返納寒鴉

初空や威風弥増す樟大樹祝・中健堂さん

初午や一灯淡き屋敷神

○ 佐藤 玲子

○ 山浦 紀子

初大師今の自分に先づ感謝

金箔のネールアートや年新た

諳ずる初夢占ひ利き目無し

老犬を胸に抱き寄せ初写真

初夢に振り向く母の割烹着

笹鳴や間口の小さき版木庫

お年玉を較べし孫等皆親に

春の日をおでこに寝入る嬰兒かな

二日はや先づは泣初め笑初

白魚の光の寿司を掌に

春燈の句

安立 公彦選



位置占むる白南天や端然と

兵庫 片井 久子

初天神の由緒たづぬやをちこちに

アクションを地で行く俳優春惜しむ(樟・吉宮鮎)

初硯墨懐かしく匂ひけり

ウイルスの拡大続く春節期

独り居や八手の花と今日も在り

老い心のみて清ら室の花

春立つや買ふつもりなき花舗たづね

福井 西本 花音

静かなる里の交番梅ひらく

田畑失せ村社細々初詣

せせらぎの音にふくらむ露の臺

白侘助風伴うて散る夕べ

早春の光ころがる水車かな

青空の風に開くや梅一輪

寒満月押し一日をしめくくる

岐阜 高井 修一

寒三日月刃文の匂ふ日本刀

煤逃げのつもりが妻もついて来る

寒月や盃かはす老いの愚痴

忘れ得ぬ一夜の恩やぬくめ鳥

寒晴や令和を背負ふ新成人

梵鐘の余音のうねり寒明くる

ためし酒これがまことの新酒とや

東京 鈴木としお

春を呼ぶ子猫育てる小学生

くり返す入退院や年は逝く

神奈川 高橋 寛子

千葉 東木 洋子